

喜多見淳

天草に

蛸は鳴かない

あまくさに
ひぐらしは
なかない

発行 近現代文芸社
発売 日本図書刊行会

天
草

蝟

江苏工业学院图书馆

鳴藏書章

かない

喜多見淳

発行 日本図書刊行会
発売 近代文芸社

〈著者略歴〉

1927年11月 熊本県天草郡五味町生まれ
現在 団体役員

天草に蛹は鳴かない
(あまくさにひぐらしはなかない)

1997年 5月20日 第1刷

著 者 喜多見 淳 (きたみ・じゅん)

発 行 蠶日本図書刊行会

発 売 蠶近代文芸社

〒112 東京都文京区目白台2-13-2

TEL (03)3942-0869

FAX (03)3943-1232

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

製 本 小泉製本所

© Jun Kitami 1997 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-89039-418-4 C0093

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

太郎物語

一章	淳樹 ^{むき} の手記	9
二章	ガンの告知	57
三章	太郎の日記	93

淳樹物語

四章	祖父の血	131
五章	父の血	181
六章	母の血	223

人物

喜多見太郎……淳樹の四歳になる孫。二歳の時百

日咳に罹り、そのため成育が遅れている。傷つきやすい性格。そのことが、祖父の淳樹にとって気になって仕方がない。

淳樹……小さい時、祖父万吉のところで育つ。膀胱ガンの宣告を受け、後二年の命と知り、『太郎物語』の執筆を思い立つ。祖父の遺文から王父の愛を知る。どこかでユヤ——妙——淳樹——逸平——太郎と続いている狂った血に怯えている。

東 あづま

逸平……淳樹の長男。太郎の父。二浪のとき淳樹に怒られ家出。大学二年の時、太宰治に心酔し、津軽の宿で自殺を図る。祖母の妙を慕う。

霧子……太郎の母。逸平の女に苦しむ。

万吉……荒河内高島宮の宮司。孫の淳樹を連れ帰り、稲、こぶ、松茸、目白などを通して自然の尊さを淳樹に教える。終生淳樹に影響を与える。淳樹五歳の時逝く。

妙——淳樹——逸平——太郎と続いている狂った血に怯えている。

華子……淳樹の妻。若い頃、淳樹の放蕩に泣く。恥をかくことが人生だと信じている淳樹について行けないものを感じている。体面をひどく気にし、貧乏なくせに、自分も中流だと思っている。

謙介……淳樹の父。生涯を地方教育に捧げる。六尺豊かな大男のくせに、どうも小回りがきかず、自分を制御できないで戸惑って、妻の妙を虐待する。ホチキン氏病（肉腫ガン

の一種）に罹り七十歳で逝く。

妙……若くして両親に死別し、叔父彦松

の手で育てられる。淳樹の母。義父万吉亡き後姑のウラに苛められる。生家に帰り初めて叔父彦松の深い愛を知る。しかし叔父彦松は卒中で倒れてしまう。

ウラ……謙介の母。わが子スギ代の父なし

子を妙の戸籍に入れてくれと迫る。妙が拒むと非情な虐待を始める。

スギ代……万吉・ウラの娘。山鹿温泉で旅役

者と出来、ついて行ってしまう。一年後、乳飲み子の直温を抱いて帰ってくる。

西

玄以^{げんい}

……医者。妙の父親。妙が七歳の時、往診の帰り崖から落ちて死ぬ。

ユヤ……妙の母親。妙が十歳の時、井戸に

入って死ぬ。

彦松……玄以の弟。妙をわが子のように可愛がる。ある日、妙の夫謙介がウ

ラをつれて現れる。妙に対する二人の仕打ちに激昂の余り卒中で倒れる。

チマ……彦松の嫁。妙の叔母。

貞夫……彦松の長男。妙の従兄弟。妙は女

学校を卒業して、貞夫を頼って京城に行く。

正夫……彦松の次男。西家を継ぐ。

阿部

権三^{ごんざう}

……妙の生家である西家の本家。妙の父玄以、彦松とは従兄弟。妙が女学校時代に通っていた家の当主。

瞳……妙のふた従姉妹。妙の代わりに八

代の医者に嫁ぐ。

天草に蛸は鳴かない

思い出は

忘却という濾過器のなかで
限りなく物語に近づいていく

太郎物語

幼い天才が

稚氣の玉手箱をひっくり返すたびに

私は 涙を流して笑いこげるのでした

一章 淳樹の手記

天草に鯛は鳴かない

——今日、主治医の安岡先生のお話を聞いて、何だか無償に落書きがしてみたくなりました。
窓の外に、映しだされた私の二年の命を見つめているところです——

『窓の外の風景』

わたしが しきりに旅に出ようとしていたとき

秋が どこまでも追っかけて来ました

へボロン！　　ヴァイオリンの音

羊角湾の入江の藍　潮騒のため息が聴こえてきました

へサクサク　　鋤の音

パーテル神父の教会の鐘　農夫のいのりが聴こえてきました

ヘカナカナ カナカナ
京浜東北線の吊り革が歯ざしりしていた午後
蛸の音が 車窓にいつぱい詰っていました

いやそれは 目黒川の藍
メタンのつぶやき

私はそのとき

天草灘の海の藍が しきりに私を誘っているのを知っていました

潮風に乗って リンリンと翔んで行け！

車窓を飛んで行く 八十号の後期印象派の風景にみとれていたホンの一瞬
私を乗せたまま

電車は私の降車駅を通過して行きました

ヘカサリ〜 そのとき

私は叢を蹴って 鬼海ガ浦の断崖からとんでいたのです

1 太郎への遺文

泣いた赤鬼

小さな足音が廊下の向こうに遠ざかっていきました。

.....

私がこの大森駅前の牧田病院の本館三階の泌尿器科病棟に入院してから二週間経ちました。七月二十四日に前立腺の手術が終わって一晚集中管理室にいて、翌日お昼に移されました。それから十日経ちました。

先刻、主治医の安岡先生が田原先生と一緒に病室にお見えになりました。そしてガン研に出していた組織検査の結果を知らせてもらいました。

やはりそうだったのか、ついに来るべきものが来たんだ……。

それから小一時間も布団の中にじっと身動きもせず膝を抱えていました。蜘蛛の巣にからめ捕られた一匹の揚羽蝶のように、キリキリ丸められて、ヒラヒラと風に揺れています。もう引

き返すことも脇道にそれることもできないのです。あたりには一面銀色の光が舞っていてその中にただ一筋の白い道が私の前から真っ直ぐに延びています。その道の長さを私ははつきり知っていました。

お前の顔が浮かんできました。私は無性にお前に逢いたくなったのです。そして病院の長い廊下を手すりにつかまってナースセンターの前にある電話口に立ちました。

「太郎の顔が見たくなかった。保育園から帰ってきたら連れてきてくれ」

「何ですかまた急に？ おかしな人……。霧子さんが帰ったら、連れて行かせます」

「それから東急に行つてウルトラマンの戦士達のセットを買つてきてくれ」

「何も今日でなくつても……。土曜日のお昼に連れてきます。その時でも」

「いや、今日がいい。ここに入院する前に太郎と見に行つて約束してきたんだ」

「そんなの、お誕生日のお祝いでしょう？ 癖になります」

「何でも思い出したことは片づけておいた方がいい」

「そんなたいそうな、たかが前立腺の手術したぐらいで……」

その夜、太郎が霧子に連れられてきました。来るなり手を出しました。

「なんだい、そのお手々は……」

「だつておばあちゃんが、おじいちゃんがなにかいいもの呉れるから行つておいでつて」

「何ですか！ おじいちゃんにお見舞いも言わないで……」